

守屋俊彦博士著『記紀神話論考』

河野 頼 人

戦後、日本神話の自由な研究が行われるようになり数々の成果が世に問われているのであるが、この度守屋俊彦博士は、戦後執筆された論文から記紀神話に関するもの二十三篇を選び（うち「夜刀神」一篇は戦前執筆、「国語国文」昭和二十一年一月発表）、

創世神話の問題

火神出生神話とその周辺

高天原と出雲の神話

天孫降臨神話とその周辺

日向神話の原型

の見事な体系のもと、『記紀神話論考』にまとめ刊行された。守屋博士が「記紀神話の構造についての研究」によって学位を取得されたのは昭和三十七年二月であったが、本書はその内容に関わっているであろう。待望久しかった博士の御研究を今こうして読むことの出来る幸せをしみじみと思うことである。

博士の本書における方法と意図されるところは、その「あとがき」に、「文献学的方法」といわれ、

「記紀の神話はもともと口承されたものであろう。しかし、げ

んに今みるものは、すでに文字に書かれ、記紀という特定の枠の中にはめこまれていく。このことを抜きにすることはできない。したがって、記紀の神話を分析するにあたっては、それが何よりも前提とならなければならない。そこで、記紀の神話を本文批判しながら、できるだけ、その原型を探ってみることにした。そのうえで、こんどは逆に、それがどのような筋道を通じて記紀の中にとり入れられたか、そして、その際どのような変貌を受けたかを考えることにした。そのために書紀の一書にとくに留意した。一書には、内容の古いものや新しいものなどがあり、記紀神話の発展段階がみられて便利だからである。この二つの操作の中から、記紀の神話の性格を明らかにしてみようとしたのが、これらの論文である。」（三九九―四〇〇ペ）

とあるところに詳しい。そして私は、こうした地道な文献学的方法が、博士の言葉に対する鋭敏な感覚と深い洞察力に裏づけられていることに感銘をうけつつ読んだのであった。

以下、論文の紹介をしていきたい。

△創世神話の問題Vは論文五篇からなる。

「葦牙―創世神話の一齣―」は、常民の創世観が記紀の神話に姿をとどめていることを明らかにし、「国生み神話の一つの背景」に、岐美二神の国生み神話は、古代農村社会の歌垣の儀礼がその背景にあって形成されていることを説かれ、次に、「岐美二神の神婚神話について」、博士は、例えば、水蛭子の誕生の神話を生んだのは農人であり、これは兄妹結婚の禁忌を説明するものであるから比喩ではなく水蛭子そのものとして理解してよく日本の風土の所産と説き、神婚神話は当時の結婚やその周辺の民俗、神話をこの一点に凝集し構成しているという。前論文「……一つの背景」において歌垣を中心に農業的呪術的世界から説かれたものを、より人間的世界に据えて解釈されているのである。

ところで、右二つの論文引用の童子女松原の歌の所掲する本が異なり、「和乎歌佐婆志理之」(一七ペ)と「……也」(三二ペ)の違いをみせる。後出のものにも、鎮火祭祀詞の引用が、「此心悪子乃心荒比爾説」(八二ペ)と「……心荒比爾説」(九一ペ)とある。その他本書には、引用文や神名の表記、紀の一書の数え方等論文によって異なる場合がみられる。論旨が記紀いづれに所拠するかの違いや論文述作の時点での最善のものによられたということもあるが、本書に体系づけられた論文として読む時、統一していただきたいかと思うことである。

「国生み神話と淡路島」「国生み神話と吉備児島」の二篇は、淡路島が何故大八島国の中心なのか、又瀬戸内海の一地方にすぎぬ吉備児島が何故大八島国の中にとり入れられているのかと問い、前者、淡路島が好ましからざる存在とされる一方では重要視されてい

る矛盾ともみえる微妙な表現を読みとり、かつて淡路の海人に朝廷反抗の歴史、そして服従としての淡路の国生み神話の奉獻のあったこと、後者、吉備国の服従に困難を伴ったことが画面に大写しになったと説かれる。そして「……と淡路島」に、その主人公の岐神もその神話とともに一地方神から成長し記紀神話の体系の中に姿をあらわし、国生みという嘗為よりしてその配偶者に相応しい美神がここに生誕、出雲神話へ展開する糸口を開くものと位置づけられ、「黄泉国訪問神話と出雲」(後述)に相関わっていくところがあるのである。

△火神出生神話とその周辺Vは四篇。

先ず「火神出生の神話」は、出雲国造家の鎮火の儀式の考察から、火神出生による美神の死の神話には古代日本の王位継承の際の慣習が投影していることを考えられ、「火神出生神話の序列」は、この一群の神話は「はじめに鎮火祭祀詞の神話が作られ、これを基盤にして記紀の火神出生神話が形成され……火の生産的方面を語る神話が派生し、その上にさらに刀剣を作る工作だとか火山現象に関する神話などが結びついて構成されている」(一〇〇ペ)といわれている。従うべき御説と思う。

猶本書の構成に関わることもであるが、本論文は「火神出生の神話」を全面的に改訂再論したとある(「国文学攷第三十七号」。この点本書でも指摘があった方がよかったのではないか。論旨や引用の重複がある。又、関連する論文が本書に収められている場合その指摘、ページ等の指示があったら各論文が猶有機的になったのではなからうか(例えば、二八四ペの「注3」等)。

「黄泉国訪問神話と出雲」は、出雲が大和朝廷に好ましくからざる

存在であったから黄泉国に結びついたのはいうまでもないが、黄泉という宗教観念はもともと出雲的なものではなかったか、出雲の宗教的なものを巧みに政治的に利用したと説く。

「黄泉国訪問神話と御門祭」は、岐神が黄泉より帰る神話を、祓の儀礼を語るものとのみならず、記には道饗祭よりもむしろ御門祭が強く焼付けられているという。そして黄泉の場面に「殿藤戸」「殿内」等家や戸口のようなものを描き、黄泉国全体を門構えのある家の如くみだてていることを否定出来ないといわれているように、本書には一字もゆるがせにしない着実な、かつ新鮮な方法が随所に見られることをくり返しておきたい。

そして、この神話に後になって卜部の勢力を上回って来た忌部の管掌する御門祭が割って入りその一部分が編成替えされた可能性をいい、記の方を新しいとみる。これは、「火神出生神話の序列」に卜部の勢力について述べたことと関連し、神話構成の複雑さを示されているのである。

△高天原と出雲の神話には七篇。そして「夜刀神」は博士の、とりわけ出雲神話研究の原点ともいえ、問題点を本書の諸論文により鋭く詳しく説かれている。

この中でも「大國主神の神話について」は本書に五十三頁を占める雄篇である。本論文を誤りなく伝えうるか不安であるがこれから述べていくと、博士は、出雲文化は高く評価出来ない、中央から遠ざかった周辺文化であり素朴な創成神話や呪術しか持っていなかったという。そして大國主神の神話を内容的に四つに分けて考察された中から因譲りの条について述べれば、出雲が消え失せて突然に葦原中国になって舞台が急に拡大されているのであるが、この矛盾に

この神話の構成の問題がひそんでいる。因譲り神話は現実の出雲の因譲りを基盤にして記紀神話の枠の中に構成され生育したものだ。何故因譲りの代表になつたかについては、出雲が巫医の呪術社会であったことに根拠を求められている。「試論」(二五三頁)と遠慮されているが出雲の本質に関わる従うべき見解であろう。

そしてこの出雲の世界は高天原に相対比する位置においてとりあげられる。即ち、「素戔嗚尊の涕泣神話」は高天原と出雲の中間に位置しているのであるが、素尊が妣の困へ行こうと泣いたため高天原を追放されたところのは合理的ではない。類同の神話を比較、これを祭の場における神人の行為とみ出雲の特殊な呪術宗教団体の世界をそこに考え、出雲の神の荒暴さを浮彫にするために出雲的なものをいろいろ利用しているのではないかという。

「天岩屋戸神話とその崩潰」は「国文学攷」第十六号発表のものを本書にて増補、より論旨が明確になっている。天岩屋戸神話は古代の天皇の本質に関することを語り、むしろここを中心に記紀神話の体系は構成されているという観点から、古い呪術の世界が崩潰、古い宗教意識が見失われ文学となりつつあること、政治的意図によって変貌がなされていることを論証。そして、「八岐大蛇退治の神話―宗教儀礼と文学との間―」では、奇稻田姬はユナリ存在、両親はその名から神婚儀礼の際農業神を神降した男巫女巫で、宗教的なものを漸次失い神懸りのな所作も親が子を愛撫するということが変わった、酒も亦神に捧げるものが蛇をだます手段としての酒になっていくといわれる。出雲世界を呪術宗教の世界と農業的なものをもってとらえ、宗教意識の崩潰の中から文学が生れて来る過程を明らかにされているのである。

「困作り神話の二重構造」には、出雲の困作り神話には三輪氏の神話が結びつけられているとある。

そしてここに、古代の氏族にはそれぞれ天降神話があったらしいということを通して裏づけられているが、肯綮にあたる鋭い指摘である。この二重構造は天孫降臨神話の条の考察にもみられ、記紀神話の本質を把握する大切な観点であると思う。

そして「三輪伝承一つ」は、大神々社発行の「大美和」第三十六号で既に読み共感を覚えていたものであるが、体系の中に据えて再読する時その所を得て小篇ながらみずみずしい。即ち、大物主神を修飾する「大和成す」の一語を手がかりに、三輪氏がかつて困作り神話を伝承していたことを立証、右の論文の補説ともされているのであるが、文学的読みの深さをしみじみと感じることである。

ところで、スサノヲのヲが目次もふくめ全部「鳴」と誤植になっている点気になることであつた。

△天孫降臨神話とその周辺▽には四篇。

「天孫降臨神話の構図」は、降臨と吾田津姫との結婚にわけて考へ、前者、真珠追衾の意味を天岩屋戸神話との関連において皇位の継承の魂の授受ということからとらえ、後者は農業神とヨナリとの結婚という呪農法の観点からおさえ、そしてそれ以上に通婚政策とみることが出来る。日向が降臨地に選ばれているのは隼人に対する意識が強く作用している、そして「きわめて大胆な予想をしてみれば、天忍穂耳尊が出雲へ、瓊々杵尊が日向へ、と二つの天孫降臨があつたともみられるのである」(二九九べ)と説かれる。

そしてこれは、ほぼ同時発表の「天孫降臨神話の一、二の問題」に、何故困作りのあつた出雲でなく日向に降り、降臨する神が途中

で交替しているのか、それはもと二つの降臨神話の一つに合体されたといひ、又鹿島神宮の縁起神話も全体天孫降臨神話の形であることを指摘、出雲にも天孫降臨神話があつたのであるが現在の形には未開の日向や或いは常陸への朝廷の願望なり希求の表白がみられるとし、隼人の服従が出雲より新しい、記紀神話体系が最後の結集をなしつつある時と殆んど重なり合っていることが日向を残したという。右の「……の構図」と相補い主題をより明確にし、「困作り神話の二重構造」とも相関連するのである。

又「天若日子の神話について」も、弓と矢を持って降る天若日子、そして「若」に瓊々杵尊が嬰児であつたこととの関係のみ、下照姫に太陽神に奉仕する巫女を考え、これを天孫降臨神話の範疇においてとらえられる。

そして「鳥の速贄」にあつても、猿田毘古神の神話について、天孫を天の八衢に迎えての問答の背後には困作りのものが揺曳、そして皇孫が降臨の場所を猿田毘古神に教示されているのは、この神を祖神とする宇治土公の強大さを物語るのではないかという。これを博士は、この神話の中に「一見童話的なあたたかい表現の中に、妙に冷たいものをひやひやと感ずる」(三三一べ)ことから分析をすすめておられるのであるが、こうした点にも博士の方法が評価されると思う。そして速贄を献上する伊勢志摩の海人の姿を、ものいわぬ海風の姿態の中に読みとって、この神話を「敗北の詩である」(三四三べ)と結ぶ。本論文も亦一篇の叙事詩であると思うのである。

△日向神話の原型▽は三篇の論文よりなる。このうち「隼人の踊り」と「隼人舞と犬吠え」は発表に前後十五年の開きがあり、後者

に前者の訂ざされているところもある。

さて、「隼人の踊り」は、何故溺死の態を演ずることを隼人の朝廷への服従の証としたのかと問ひ、これは海洋系民族の迎神の儀礼ではなかつたか、それを溺死と描くことによつて記紀的なものへ変貌していったことを明らかにされ、そして「隼人舞と犬吠え」において、「隼人の踊り」に隼人を「この国に渡來した狩獵民族であつたにしても、海人的なものに幾分交質」（三五〇ペ）と考へていたのだが狩獵民族とみうる形跡があるとされ、「その隼人が水中において神を迎える宗教儀禮を持っていたといふことは、はなはだ理解しにくい」（三六三ペ）これは本来阿曇氏の服従の誓詞であつたものを、朝廷の隼人鎮定の時期と神話の記紀体系が最後の結果を急ぎつゝあつた時と平行している、ここに阿曇氏の服従を語るものが隼人のそれになつてゐる秘密があるのではないか、犬吠えがもと隼人舞の実体ではなかつたか、そして特に行幸に国界や山川道路の曲を選んで吠えたといふことから、隼人の強力な呪力を逆利用してゐると説かれ、「海宮訪問神話の拡充」は、一つの神話が他の神話と交渉し拡充し、このような多面的な姿を呈するようになった。即ち、この神話の管理者は阿曇氏であり、若者の成年式の話とみ、阿曇の若者は激しい訓練を受け儀禮的な死の世界である海神國を通過して海幸として逞しく成長していった。だから山幸彦が海へ行つて呪物を手に入れるのは変な話で、紀四の一書に火折命が海幸になつてゐるのが元の型ではなかつたか。そしてヲナリ的な女性の協力による呪物獲得が語られてゐるのであるから、異族婚姻によつて着色されていくことは容易な操作であつた。阿曇氏の朝廷服従によつてこの神話は引離され加工されて、最後の調整段階で隼人の服従にすりか

えられたといふ。併せて文学化への方向をも後づけられたのである。以上読み誤りを恐れながら蕪雜な筆で内容の紹介をして來たのであるが、博士は地道な方法に豊かな感性を織り込み結論に到達される。そして今日の到達点において定説となつてゐるものも多い。私は本書を読み勉強しつつ、博士が如上の文献学的方法を堅持しつつ本質に迫り明確にされていく学問姿勢を、いさぎよいと感じ入るのである。

博士は記紀の神話体系を天皇氏による支配合宜化といふところに措定され、その方向にむかつて神話が結果調整されてゐることを説かれ、その複雑さを見事に剔抉されてゐる。しかしもし猶望めるならば、その合宜化が、記紀編纂の天武・持統・文武・元明・元正朝といふ現在の理念といかに関わりつつ体系化されていったかについても筆をさいてほしいと思つたことであつた。それから、紀一の一書について、「この神話の政治的な意図からする最も行きついた形をみる事が出来る」（一四一ペ）といわれる。合宜化といふ面からいへば何故これが本文に採用されなかつたのか、又本書の中に紀の一書に対する博士の評価や見解をお示しいただくところがあつたらと思つたことであつた。

猶心覚えまでに、一三七頁引用の垂仁紀は「二十三年」があらたい。一五四頁「天鈿女……柳三裳帯於躋下」は「抑」、三三七頁二行目「佐」は「左」とあるべき。二二九頁十二行目「こうしたたからすれば」は文意不明。

終りに、本書に関わる博士の御論文には、発表の近いものでいへば「赤猪子の話―三輪伝承考―」（『日本書紀研究―三品先生追悼記念―』第六冊所載）等、感銘深いものはその他数多い。本書の範

冊を神代に限定されているので省かれたのであろう。又、祝詞・風土記、下っては日本霊異記に関する御論文も多い。是非早い機会におまとめ下さって後学の指針ともしていただきたく心からお願ひ申し上げたい。(48・12・21)

——昭和四十八年五月二十日刊 A5判 四〇七頁 三、

八〇〇円 雄山閣——

——北九州大学文学部教授——